『江戸川大学紀要』第 33 号（2023 年 3 月）pp. 91-105

青森ねぶたにおける女性の造形

阿南　透*

要　約

本稿は，青森ねぶた祭に登場する燈籠である「ねぶた」において，取り上げられる造形に女性が増加している傾向について論じるものである。

青森ねぶた祭とは，毎年 8 月 2 日から 7 日まで，青森県青森市の中心部で夕方から夜に開催される，人形型の大型の燈籠山車の合同運行である。ねぶたの題材は毎年変わり，その優れた造形が祭礼を発展させてきた。本稿ではまず，ねぶたの題材の傾向を明らかにするため，1955 年から 2022 年までのねぶたの題材を集計，分類し，ねぶたの表現は迫力を重視するものであったことを示した。次に，近年は女性を造形したねぶたが増加していることを示すため，女性を造形したねぶたの一覧表を示し，2010 年頃から増加してコンスタントに出現していることを明らかにした。また，登場人物の特徴から，華麗で優美な特徴をもったねぶたが増加しつつあることを述べた。

1. はじめに

本稿は，青森ねぶた祭に登場する燈籠である「ねぶた」において，作られる造形に女性が増加している傾向について論じるものである。

青森ねぶた祭とは，毎年 8 月 2 日から 7 日まで，青森県青森市の中心部で夕方から夜に開催される，大型の燈籠山車の合同運行である（7 日は昼に運行し，夜に海上運行がある）。この燈籠は「ねぶた」と呼ばれ，針金の造形に紙を貼り，着色したものを中から電球で照らす。毎年，ねぶた師と呼ばれる専門家が，日本や中国の歴史・伝説などから題材を選び，制作チームを率いて新作を作り，祭りが終わると廃棄する。ねぶたは台車に載せて運行し，その際には囃子の演奏にあわせて，ハネトと呼ばれる踊り子たちが周囲を跳ね回る。現在，22 団体が運行している。ハネトには自由参加を認めているため人数は変動するが，一晩に 1 万人近い人々が参加する。そして，6 日間で 250 万人から 300 万人程度の人出があり，日本最大級の動員力を誇る行事になっている。

祭りの由来には諸説あるが，民俗学者は，「眠り流し」と呼ばれる習俗に由来すると考えている。これは夏の暑い時期に睡魔を祓い流す行事とされ，災厄を祓い清める行事とも関連する。こうしたことから，国の重要無形民俗文化財に指定されている。

青森ねぶた祭がここまで発展した最大の理由は，ねぶたが優れた造形であることである。このため日本を代表する祭りとして海外からの評価も高く，30 回の海外遠征を経験している。

とはいえ，ねぶたは最初から現在のような造形であったわけではない。類似の行事は，弘前市，五所川原市，能代市など，青森県から秋田県にかけての日本海側に数多く分布しているが，いずれも割竹を組んだ骨組に紙を貼り，色を塗った素朴なものであった。形も，青森市のように人形型もあれば，弘前市では扇形の燈籠が主流であるなど，各地でさまざまであった。そうした中で青森市では，戦前には人が数人で担いだり，リヤカーに載せて引いたりする程度の小さな造形であった

2022 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　現代社会学科教授　民俗学

ものが，戦後の道路拡張とともに幅広のねぶた運行が可能になり，横幅が広がっていく。こうして青森市では，幅広のねぶたが標準になる一方，広告アーチや信号があるために高さ制限があり，高さ5メートル，幅9メートル，奥行き7メートルを上限とする規格が定まった。なお，ねぶたの審査と表彰も行われ，賞を目指す競い合いが祭りを活気づけるとともに，ねぶたの出来栄えの競い合いが制作者であるねぶた師を刺激し，芸術的に優れた表現を生み出す原動力になった。

本稿では青森ねぶた祭の戦後の発展のうち，特に題材の変遷に注目する。そして，迫力ある造形の流行が青森ねぶた祭を発展させてきたことと，近年の傾向である，女性を作ったねぶたの登場について述べてみたい。

2. ねぶたにおける造形

2. 1. 人物を造形した燈籠

青森ねぶたの特徴は，人物を造形した大型燈籠であることにある。しかも，実物以上に大きい燈籠を作る。巨大な人物像はそれだけで迫力がある。

いつからねぶたに人物を作るようになったかはわからない。日本の祭礼に登場する曳山に人形を載せることは各地で見られる。たとえば京都の祇園祭には鉾や山が登場し，人形を使って「五条大橋の牛若丸と弁慶」「宇治川の先陣争い」など，著名な歴史や伝説の名場面を表現している。これらは地域の人々が工夫を凝らし，祭神とは必ずしも関係のない人物が選ばれている。こうした山や鉾の造形は，全国の祭礼に数多く見られる。

一方，日本の祭礼には燈籠や提灯を用いるものがある。そして，燈籠を山車に仕立てる祭礼は一定数見られるものの，燈籠の造作に工夫を凝らし，人物を造形する祭礼は他にほとんどない。

ところがねぶたの場合には，人形を飾るのではなく，人形の燈籠を作る。そして日本や中国の歴史，伝説，物語，歌舞伎の名場面など，著名な物語や名場面を燈籠で構成し表現する。その造形の素晴らしさがねぶたの最大の特徴であり，魅力である。しかも，ねぶたは毎回新しく作られるため，その造形は人々の好みを反映して時代とともに変化している。

2. 2. ねぶたの造形に関する先行研究

従来のねぶた研究は，民俗学から祭礼の起源や変遷を明らかにする研究や，文化人類学の儀礼研究の影響を受け，その狂騒的な側面に注目するものが主流であった。その一方で，ねぶたの芸術的な側面に対する探究は緒に着いたばかりであり，本格化したとは言いがたい状況にある。

青森ねぶたの造形については，まず，毎年制作しては破棄される個々のねぶたを記録したねぶた一覧表の作成と公開が，ねぶたを「祭りの道具」として消耗品扱いするのではなく，「作品」とみなす意識を広め，根付かせたと考えている。私は，2000年に青森市が刊行した『青森ねぶた誌』に，「戦後大型ねぶた一覧」として，制作年，制作者，題名，団体名，受賞の一覧表を作成し掲載した［宮田・小松　2000］。2016年に同書の増補版が発行された際には一覧表を増補し，2015年までのねぶたを収録した［宮田・小松　2016］。また，2016年には工藤友哉氏が，戦後のねぶた約1300台分の写真をまとめた資料集「青森ねぶた全集」を作成した。同書は出版されてはいないが，青森県立図書館に所蔵されている（その経緯は［工藤　2021］に詳しい）。

林広海氏は，これらの一覧表も踏まえて，戦後のねぶたの写真をインターネット上で閲覧できるアーカイブ「ねぶた画廊」を公開しただけでなく，一般から募集した写真を追加してさらなる充実を図った。これは2020年に「青森ねぶたミュージアム」と名称を変更して現在に至っている[(1)]。これにより，戦後のねぶたをウェブサイト上で検索し，写真を見ることができる仕組みが出来上がった。青森ねぶた祭の主催者である実行委員会も，ウェブサイトにアーカイブのページを設け，2001年以降のねぶたの下絵と写真を公開している[(2)]。こうして，過去のねぶたとその写真を参照できる仕組みが出来上がった結果，ねぶたを作品とみなす傾向が浸透し，さらに，造形の出来栄え

を評価したり，作風やその変遷に対する関心が増して行ったものと考えられる。

一方，制作者であるねぶた師に注目した論考として，澤田繁親氏が，青森でねぶたを制作した歴代の制作者の評伝をまとめている［澤田　2004, 2006］。

こうした中で，青森ねぶたの造形の歴史をたどった研究として，工藤友哉氏の論考がある［工藤　2020］。工藤氏は，制作技術面の変化として，昭和40年代前半までは骨組みに竹と針金を併用したのに対し，40年代後半からは針金が主流になり，竹では表現できなかった曲線の表現が可能になったことを指摘する。その上で，同時期に「迫力」を強調する作品が増加し，次に「躍動感」ある構図が登場して，20世紀末までのねぶたの様式が決定づけられたとする。

さらに工藤氏は，造形の変遷を明らかにするために，パンフレットや郷土誌などでねぶたを形容する表現に注目した。昭和50年代以降から20世紀末までのねぶたの表現は一貫して似通っており，造形的特徴として「豪華絢爛」「哀調」「殺伐」「グロテスク」が挙げられている（主催者発行のパンフレット『青森ねぶた81』による）。別の雑誌では「勇壮」「異形」「華麗」「哀調」「殺伐」を挙げている（『月刊キャロット』1982夏の別冊号）。共通しているのは，「華麗（豪華絢爛）」「殺伐」「哀調」「グロテスクさ（異形）」であり，これが「合戦」「歌舞伎」「神仏」などの題材観とも合致したという。ところが平成時代後半（21世紀以降）になると，「グロテスクさ（異形）」「殺伐」「哀調」が徐々に見られなくなり，「勇壮」「華麗」に主眼が置かれるようになるというのである。

こうした造形史の捉え方については私も同感であり，本稿も同様の視点を前提にして執筆している。

2. 3. 審査とその影響

青森ねぶたの発展には，審査と表彰の仕組みが大きな影響を与えている。賞の変遷については［宮田・小松 2016］の5章3節に記述したので繰り返さないが，賞を目指す団体やねぶた師などの競い合いが，祭礼を発展させ，作品のレベルアップに貢献してきた。

審査方法は1995年に大きく変わっている。それ以前は審査員による合議方式，すなわち話し合いで賞を決定していた。1995年からは審査員が採点した点数を合計する方式に変わっている。いずれにしても，受賞ねぶたは他のねぶた師に影響を与え，作風のいわば流行を形成した。

このことは，迫力あるねぶたの興隆についても当てはまると思われる。これについては［阿南 2003］でも述べたところであるが，1967年に，当時の最優秀賞であった田村麿賞を受賞したのは，川村勝四郎の「国引」であった。これは出雲国風土記に題材を取り，八束水臣津野命が国を曳いている場面である。筋骨隆々とした裸の男の造形は，それまでのねぶたではあまり見ることのない，迫力を重視したものであった。これ以後，迫力のあるねぶたが続々と登場し，田村麿賞を受賞する。「項羽の馬投げ」（1970，鹿内一生），「金剛力士」（1971，鹿内一生），「国引」（1972，佐藤伝蔵）などが有名である。なかでも佐藤伝蔵の「国引」は，大きな顔，見開く目と大きく開いた口，逆立つ髪，力感あふれる筋肉の表現など，迫力ある作品である上に，翌年に開館した青森県立郷土館に展示され，ねぶたの典型，代表作のような扱いを受けることになった。現在もレプリカが展示されている。

現在の審査方法は，年により細部の違いはあるが，基本的には約30人の審査員が審査する。うち20人は主催団体，報道機関，有識者などの「審査委員」，10人は一般から公募する「一般審査員」である。審査員は，ねぶた，囃子，運行・ハネトの3部門をそれぞれ100点満点で採点し，それをねぶた60％，囃子15％，運行・ハネト25％の比率で合計して総合順位を決める。総合順位の1位から5位までの団体に，総合賞であるねぶた大賞（1位），知事賞（2位），市長賞（3位），商工会議所会頭賞（4位），観光コンベンション協会会長賞（5位）が授与される。部門賞として，ねぶた1位の制作者に最優秀制作者賞，2，3位

のねぶたの制作者に優秀制作者賞，囃子１位の団体に囃子賞，運行・ハネト１位の団体に運行・跳人賞が授与される。受賞は一種の権威となり，注目を集め，それを団体やねぶた師を評価するための指標とする傾向もある。

審査にあたり，青森ねぶた祭審査委員会では「青森ねぶた祭の伝統性を重視しつつ，審査員の感性により総合的に評価し採点すること」としながらも，ねぶた本体の審査の着眼点として，審査委員に５項目，10 の着眼点を提示している。すなわち，1. 表現（発想企画，勇壮華麗，躍動感，重厚感），2. 構図（全体的な見栄え，バランス，見送りの工夫），3. 色彩（墨の線と効果的な色づかい），4. 明暗（効果的照明），5. 繊細度（有効な細やかさ）である（「令和４年度青森ねぶた祭審査要綱」による）。しかし，５項目をそれぞれ採点するのではなく，こうした項目と着眼点を踏まえつつ，総合評価として採点することが求められている。

ここでは，表現の項目中に，勇壮華麗，躍動感，重厚感といった言葉があるものの，「迫力」を評価ポイントとして明示してはいない。しかし，ねぶたの表現として迫力を重視する傾向は長く続いてきた。とはいうものの，「勇壮華麗」の「華麗」という言葉からは，華やかで多様な色彩に対する評価も基準の一つであることがうかがえる。迫力だけがねぶたではない，という見方を可能にする余地がある。

つまり，これらの着眼点が示されてはいるものの，採点は個々の審査員の美意識に基づいて行われる。審査員の中には，一般募集した審査員もいることから，その時々の社会における美意識を一定程度は反映したものになると考えられる。

3. ねぶた題材の傾向

私は 2011 年に，1946 年から 2010 年までに作られた青森ねぶた 1251 台について，題材を分類し，その変遷をまとめた［阿南　2011］。今回は，前回の集計から 10 年経過したこともあり，2011 年から 2022 年までの作品を加えるとともに，1955 年頃までは記録の欠落も多いことから集計から外し，1955 年から 2022 年までの 1308 台について題材を集計した。このうち５回以上制作された題材をまとめたものが表１である。ここから，戦後の青森ねぶたにおける典型的な題材をテーマ別に分類すると，以下のようなテーマがある。

表１　５回以上制作された題材

題材	台数	題材	台数
鍾馗の鬼退治	26	車引の場	8
素戔嗚の大蛇退治	23	織田信長	8
紅葉狩	18	天の岩戸	7
曽我兄弟の仇討ち	17	津軽為信	7
綱館	17	火消し	7
川中島の戦い	16	玉藻の前	7
羅生門	16	源為朝と紀平治	7
酒呑童子退治	16	項羽の馬投げ	7
本能寺の変	15	張順水門を破る	6
南祖坊と八之太郎	15	桃太郎の鬼退治	6
風神雷神	14	芳流閣上の闘い	6
草薙剣	13	道真の祟り	6
勧進帳	12	毘沙門天	6
義経渡海	12	三すくみ	6
巌流島の決闘	11	岩見重太郎狒狒退治	6
牛若丸と弁慶	11	源頼光と坂田公時	6
船弁慶	10	村上義光錦旗奪還	5
連獅子	10	朝比奈三郎城門破り	5
戻橋	9	不動と龍	5
武松の虎退治	9	鍋島騒動	5
曽我五郎と御所五郎丸	9	雷神	5
縄文	9	日本武尊の熊襲退治	5
宇治川の先陣争い	9	賤ヶ岳の戦い	5
暫	9	巴御前の奮戦	5
関羽	9	武田信玄	5
源義平の祟り	9	新田義貞龍神祈願	5
牛若丸と天狗	9	海幸彦と山幸彦	5
九紋龍と跳澗虎	9	坂上田村麿蝦夷征伐	5
文覚上人の滝行	8	神武東征	5
草摺引	8	桶狭間の戦い	5
平将門	8	狐忠信	5
大森彦七と千早姫	8	坂上田村麿	5
土蜘蛛	8	吉野山の決戦	5
九紋龍と魯智深	8	坂田公時の鬼退治	5
金剛力士	8	安倍晴明	5
国引	8	源為朝の鵞退治	5
源頼政ぬえ退治	8		

・戦い

合戦，決闘など，侍が戦う題材である。曽我兄弟の仇討ち（17 台），川中島の戦い（16 台），本能寺の変（15 台），巌流島の決闘（11 台）などが上位にあるほか，さまざまな戦いが作られている。また，九紋龍と跳澗虎（9 台），九紋龍と魯智深（8 台）などの水滸伝や，三国志の一場面を表現したねぶたも多いが，戦う姿で表現することが多い。このように「戦う男」は，ねぶたの定番になっている。

・鬼退治

鬼を退治する，あるいは鬼と戦う場面も非常に多い。鍾馗の鬼退治（26 台），紅葉狩（18 台），綱館（17 台），酒呑童子退治（16 台），戻橋（9 台）などが上位に見られる。迫力のある鬼と，刀を振りかざして戦う武者の戦いの場面である。

・龍（大蛇）退治

龍（あるいは大蛇）は，素戔嗚の大蛇退治（23 台）が飛び抜けて多い。素戔嗚尊が八岐大蛇を退治する場面である。近い題材として「南祖坊と八之太郎」（15 台）がある。十和田湖伝説に由来する題材で，南祖坊が，十和田湖の主である八之太郎が変身した龍と戦う場面である。

このほか，鵺，虎，狒々，鷲などを退治するねぶたもある。退治する武者の迫力が強調されるねぶたである。

・恐ろしい神仏

神像や仏像には，恐ろしい形相で相手をにらみつける迫力のある像がある。それらを造形したねぶたとして，風神雷神（14 台），金剛力士（8 台），国引（8 台），毘沙門天（6 台），不動と龍，雷神（各 5 台）などがある。

・怪力の人物

怪力の持ち主がその力を発揮する場面を作ったねぶたである。出雲国風土記に題材を取り，八束水臣津野命が国を曳いている場面を造形した「国引」（8 台）を始めとして，項羽の馬投げ（7 台），張順水門を破る（6 台），朝比奈三郎城門破り（5 台），そして女武者である巴御前の奮戦（5 台）などがある。

・死者の祟り

恨みを残して死んだ者の霊が武者に襲いかかる話に基づくねぶたである。船弁慶（10 台），源義平の祟り（9 台），菅原道真の祟り（6 台）などがある。怨霊と戦う武者の迫力と，死霊のグロテスクな表現が見られるねぶたである。

・歌舞伎の名場面

勧進帳（12 台），連獅子（10 台），暫（9 台），車引の場（8 台）など，歌舞伎でよく知られた場面を作ったねぶたである。暫のように，睨む表情を強調したねぶたもあるものの，迫力だけではない分野ではないかと思われる。

・青森ゆかりの歴史・伝説

源義経北行伝説に由来する「義経渡海」（12 台），三内丸山遺跡の発掘以後作られるようになった「縄文」（9 台），初代津軽藩主「津軽為信」（7 台）など，青森ゆかりの伝説，歴史，あるいは遺跡に由来するねぶたである。この他にも，青森県内の伝説は数多く取り上げられている。しかし，繰り返しねぶたに制作される題材はさほど多くなく，1 回限りの題材も多いため，表には登場していない。また，内容はさまざまであり，一定の傾向があるわけではない.

このように，戦いと，鬼をはじめとする化物退治，祟る死霊との戦いなどがねぶたの題材の主流であり，その表現としては迫力を重視した造形になる。戦後という長期間で見た場合には，迫力ある造形が求められてきたことがうかがえる。

4. 女性が登場するねぶた

4. 1. ねぶたに登場する女性

近年，女性が登場するねぶたが増加している印象がある。このことを具体的に示すため，女性が登場するねぶたの一覧を作成した（表 2)。表で

表２　女性が登場するねぶた

年	制作者	題名	団体	正面登場人物	見送り	賞
1958	北川啓三	天の岩戸	東北電力	天細女命、手力男命		
1959	秋田覚四郎	俵藤太秀郷三上山ムカデ退治の場	消防第三分団	藤原秀郷、龍女		
1962	秋田覚四郎	那須の与一　扇の誉	消防第三分団	那須与一、玉虫		
1970	川村勝四郎	天の岩戸	国鉄	天細女命、手力男命		
1972	佐藤伝蔵	素戔嗚尊の大蛇退治	日本通運	（素戔嗚尊）	奇稲田姫	
1974	山内岩蔵	玉取姫と大蛸の格闘	消防第二分団	玉取姫		
1975	千葉作龍	自雷也	電電公社	（児雷也、大蛇丸）	綱手	
1981	石谷進	鳴神	ねぶた愛好会	雲の絶間姫、鳴神上人		
1981	北村陸・明	鬼神お松	板金	お松、夏目仙太		製作賞
1981	森次男	巴御前の奮戦	国鉄	巴御前、御田八郎師重		
1981	山内岩蔵	天の岩戸開き	青森大学	天細女命、手力男命		
1984	穐元鴻生	勢多の唐橋	市役所	藤原秀郷、龍女		
1984	鹿内一生	天女祝舞	東北電力	天女		
1985	鹿内一生	水滸伝	東北電力	扈三娘		
1987	北村隆	天の岩戸開き	JR	天照大神、手力男命		
1988	北村隆	素戔嗚尊大蛇退治	JR	（素戔嗚尊）	奇稲田姫	
1988	千葉作龍	千姫奪還	ナショナル	坂崎直盛、千姫		
1989	石谷進	築山御前	マルハ	築山御前、野中重政		
1990	福地北舟	浦島太郎と乙姫様	私たち	浦島太郎、乙姫		
1991	北村隆	那須与一	青森大学	那須与一、玉虫		
1992	穐元鴻生	仁田四郎忠常　神霊を見る	市役所	仁田四郎、官女		
1992	福地北舟	一寸法師	私たち	一寸法師、鬼、女		
1993	石谷進	野中重政と築山御前	愛好会	築山御前、野中重政		
1993	北村隆	鏡獅子	青森大学	女子		
1993	北村隆	滝夜叉姫と太郎光国	JR	滝夜叉姫、大宅太郎光圀		
1993	福地誠郎	素戔嗚尊と櫛稲田姫	私たち	素戔嗚尊、奇稲田姫		
1994	北村隆	狐忠信	ビブレ	佐藤忠信、静御前		
1995	川村心生	巴御前の奮戦	県庁	巴御前、畠山重忠		
1995	北村隆	那智の滝	ビブレ	（遠藤盛遠、勢多迦童子）	矜羯羅童子	
1997	穐元鴻生	天の岩戸	東北電力	天照大神、手力男命		
1998	北村隆	巴御前	ビブレ	巴御前、畠山重忠		
1998	北村隆	児雷也	JR	（児雷也、大蛇丸）	綱手	
1998	福井祥司	夏目仙太と鬼神お松	日通	夏目仙太、お松		
1999	北村隆	天孫降臨	ビブレ	猿田彦、天細女命	伊弉諾尊、伊弉冉尊	
2000	石谷進	鬼神のお松	愛好会	夏目仙太、お松		
2001	北村隆	諸葛亮孔明と南蛮王	JR	（諸葛孔明、猛獲）	祝融夫人	ねぶた大賞、制作賞
2002	北村隆	陰陽師	JR	（阿倍晴明、鬼）	女	
2002	竹浪比呂央	公時と山姥	マルハ	坂田公時、山姥		
2003	穐元鴻生	児雷也	ヤマト	（児雷也、大蛇丸）	綱手	
2003	福井祥司	飛天双妃図	NTT	天女		
2003	私たち一同	紅葉と平維茂	私たち	紅葉、平維茂		
2004	北村運明	托塔天王　晁蓋	板金	（晁蓋）	男と迦陵頻伽？	市長賞
2004	竹浪比呂央	素戔嗚	マルハ	（素戔嗚尊）	奇稲田姫	
2004	千葉作龍	戸隠幻想　紅葉狩	消防第二分団	紅葉、平維茂		
2004	福井祥司	義経千本桜	NTT	佐藤忠信、静御前		
2004	村元芳遠	釈迦如来誕生　天上天下唯我独尊	に組・東芝	（釈迦）	女（絵）	
2006	北村運明	三国志「張飛、厳顔を降す」	日立	（張飛、厳顔）	女	
2007	有賀義弘	義経千本桜　狐忠信	自衛隊	（佐藤忠信、速見藤太）	静御前	
2008	竹浪比呂央	将門の神霊 滝夜叉を救う	JR	（平将門、大宅太郎光圀）	滝夜叉姫（絵）	市長賞、優秀制作者賞
2008	千葉作龍	義経千本桜　狐忠信	パナソニック	佐藤忠信、静御前		
2009	穐元和生	素戔嗚尊「八岐大蛇退治」	東北電力	素戔嗚尊、奇稲田姫		
2009	北村隆	男伊達と不道明	に組・東芝	（新門辰五郎、不動明王）	八百屋お七	
2009	外崎白鴻	津軽鬼神伝　名刀鬼王丸	市役所	鬼王丸、金子神、女		
2010	北村隆	碁盤忠信	青森山田学園	（佐藤忠信）	静御前	
2010	竹浪比呂央	天孫降臨猿田彦	JR	（猿田彦、瓊瓊杵尊）	天照大神	
2010	京野和鴻	三国志演義「呂布と董卓」	市民	（呂布、董卓）	貂蝉	
2012	北村麻子	琢鹿の戦い	市民	（黄帝、蚩尤）	女と赤ん坊	優秀制作者賞
2012	北村隆	卑弥呼と狗奴国の戦い	青森山田学園	卑弥呼	女	
2012	北村運明	イザナギ火の神を討つ	板金	（伊弉諾尊、軻遇突智）	天照大神、手力男命	
2013	有賀義弘	那須与一	自衛隊	那須与一、玉虫		
2013	北村麻子	川中島	市民	（上杉謙信、武田信玄）	八重垣姫	
2013	北村運明	十和田湖伝説 八之太郎と南祖坊	パナソニック	（南祖坊、八之太郎）	お松、夏目仙太	
2013	千葉作龍	古事記 日本創生	サンロード	伊弉諾尊、伊弉冉尊		知事賞
2013	千葉作龍	高橋竹山 風雪流れ旅	消防第二分団	高橋竹山、男、女		
2014	北村隆	武内宿禰　宝珠を得る	に組・東芝	（武内宿禰、安曇磯良）	神功皇后	
2014	北村隆	児雷也	ヤマト	（児雷也、大蛇丸）	綱手	商工会議所会頭賞、優秀制作者賞
2014	北村運明	箙の梅　景季奮戦	パナソニック	（梶原景季）	那須与一、玉虫	観光コンベンション協会会長賞
2014	竹浪比呂央	大間の天妃神 千里眼と哪吒	菱友会	天妃神、千里眼、哪吒		知事賞、最優秀制作者賞
2014	竹浪比呂央	相馬太郎良門 妖術を得る	JR	（相馬良門）	滝夜叉姫	
2014	立田龍宝	雲漢	青年会議所	（牽牛）	織女	
2014	外崎白鴻	剛力 白藤彦七郎	市役所	（白藤彦七郎、羽柴秀吉）	女	
2015	北村麻子	執金剛神と平将門	市民	（平将門、執金剛神）	滝夜叉姫	観光コンベンション協会会長賞、優秀制作者賞
2015	北村春一	張順、湧金門の勇姿	NTT	（張順）	扈三娘	
2016	北村春一	天岩戸伝説	NTT	天照大神、手力男命、天児屋命	天細女命、布刀玉命？	
2016	北村隆	俵藤太と竜神	ヤマト	藤原秀郷、龍女	龍女	知事賞、優秀制作者賞
2016	北村運明	怪力朝比奈、北条に挑む	パナソニック	（朝比奈三郎）	巴御前	
2016	手塚茂樹	海神と山幸彦	マルハ	（海幸彦、山幸彦）	豊玉姫	
2017	北村春一	妖術師 滝夜叉姫	NTT	滝夜叉姫、大宅太郎光圀		優秀制作者賞
2017	北村隆	空飛ぶ権現様と火消し	に組・東芝	（火消し、権現）	？	観光コンベンション協会賞
2017	北村運明	吹越村の火消し権現	日立	（火消し、権現）	リンゴを捕る女	市長賞
2017	千葉作龍	源頼光 足柄山中に金時と出合う	サンロード	（源頼光、坂田公時）	金太郎、女、熊	
2018	有賀義弘	児雷也	自衛隊	（児雷也、大蛇丸）	綱手	
2018	北村麻子	入雲龍 公孫勝	市民		葛飾北斎、応為	市長賞、優秀制作者賞
2018	北村春一	西王母の祝福	NTT	西王母、穆王		知事賞、優秀制作者賞
2018	北村隆	竜飛の黒神 男鹿の赤神	青森山田学園	竜飛の黒神 男鹿の赤神、女神		
2018	北村運明	おしら様	板金	男、女、馬		
2018	北村運明	元禄水滸伝	パナソニック	（閻魔王）	天女？	
2018	立田龍宝	永久の安家　善知鳥・安潟	青年会議所	天照大神、巫女	宗像三女神	
2018	京野和鴻	西遊記 天竺への道	市役所	（孫悟空、金角、銀角）	猪八戒、沙悟浄、三蔵法師	
2019	内山龍星	天の岩戸	市ド連	天照大神、手力男命、天細女命	伊弉諾尊、伊弉冉尊	
2019	大白我鴻	朝比奈三郎と閻魔	県庁	（朝比奈三郎、閻魔王）	一休、地獄大夫	
2019	北村麻子	神武東征	市民	（神武天皇）	女神	知事賞、優秀制作者賞
2019	北村春一	瓊瓊杵尊と木花咲耶姫	NTT	瓊瓊杵尊、木花咲耶姫		商工会議所会頭賞、優秀制作者賞
2019	北村運明	一角仙人と竜神	パナソニック	一角仙人、竜神、旋陀夫人	インド人風の男と女	
2019	北村運明	坂上田村麿ねぶた伝説	日立	（坂上田村麿、屯慶）	坂上田村麿、阿屋須	
2019	手塚茂樹	大森彦七と千早姫	マルハ	大森彦七、千早姫		
2021	北村麻子	雷公と電母	市民	雷公、電母		金賞
2021	北村運明	疫病祓いスサノオ神話	日立	素戔嗚尊、奇稲田姫		銅賞
2021	林広海	牽牛織女天の川	日通	牽牛、織女		
2022	北村麻子	琉球開闢神話	市民	アマミキヨ、シネリキヨ	女	市長賞、優秀制作者賞
2022	北村春一	素戔嗚尊　八岐大蛇退治	NTT	素戔嗚尊、奇稲田姫		
2022	北村春一	毘沙門天と吉祥天	板金	毘沙門天、吉祥天		優秀制作者賞
2022	北村隆	三内丸山　縄文の祈り	青森山田学園	縄文人の男、縄文人の女		
2022	北村隆	鍾馗	に組	（鍾馗、玄宗皇帝）	楊貴妃、鬼	商工会議所会頭賞
2022	竹浪比呂央	龍王	菱友会	（難陀龍王、沙羯羅龍王）	弁財天	ねぶた大賞、最優秀制作者賞

は，ねぶたの正面と，ねぶたの背面に当たる「見送り」に分けて登場人物を記した。女性が登場する場合には網かけをして示した。正面に女性が登場しない場合には，登場人物名（男性）をカッコで示した。見送り欄は，女性が登場する場合にのみ記載した。ねぶたを出す団体名については，青森市で用いられる略称で示した。賞については，総合賞とねぶたの部門賞のみ記載した（なお，2021 年の青森ねぶた祭は中止になったが，代替行事として「『心に灯せ　ねぶた魂』映像情報発信事業」が開催され，ねぶた本体だけの審査が行われ，金賞・銀賞・銅賞の 3 賞が授与された）。

表の作成に際しては，過去のねぶたの写真を見て女性の造形の有無を確認した。私は 1997 年から青森ねぶた祭を調査をしているので，1997 年以降は，私が撮影した写真を改めて点検し，女性の造形が写っているものを収録した。1996 年以前は，『青森ねぶた誌』所収のねぶた一覧表にある題名から女性像の有無を推測し，データベースを検索してねぶたの写真を見て確認した。具体的な登場人物名の推定にあたっては，ねぶた師・竹浪比呂央氏のご協力をいただいた。女性ではあるが人物名が特定できていない造形は「女」として示した。しかし，特にねぶたの背面である見送りについては写真が少なく，現時点で確認できていないねぶたもある。また，女性は脇役として作られているものが多いため，題名からの推測では見落としている可能性もある。従って表には遺漏のある可能性があり，その点は今後とも調査を進めていきたい。また，観音，弁財天，吉祥天などの神仏は，明らかに女神として制作されたと推定できる場合にのみ表に掲げた。この点では制作者の意図を誤解している可能性もある。これらの点から，完成度の低い表であることはお断りしておきたい。

表 3　複数回登場した女性（女神）

人物	台数
天照大神	7
奇稲田姫	7
天鈿女命	6
滝夜叉姫	5
綱手	5
静御前	5
お松	4
巴御前	4
玉虫	4
龍女	4
伊弉冉尊	3
築山御前	2
紅葉	2
織女	2
扈三娘	2

1955 年から 2022 年までのねぶた 1308 台のうち，女性が登場するねぶたは 105 台，約 8％であり，1 割に満たない数である。戦後という期間で見た場合には，非常に少ないことがわかる。

次に，題材の傾向を見るため，複数回登場した人物と回数をまとめたものが表 3 である。複数回の登場は，ねぶたの題材として一定の評価を得たものと考えたためである。人物と作品を簡単に紹介すると次のようになる。

・奇稲田姫

素戔嗚尊（スサノオノミコト）が出雲で八岐大蛇を退治する神話「素戔嗚の大蛇退治」に登場する。この題材を取り上げたねぶたは数多く作られ

写真 1　竹浪比呂央「素戔嗚」（マルハ，2004）

写真 2　北村春一「素戔嗚尊 八岐大蛇退治」（NTT，2022）

ており，素戔嗚尊の迫力ある造形がねぶたの中心になる。その中で，生贄にされるはずだった奇稲田姫を脇役として造形したねぶたが作られている。見送りに奇稲田姫を配置する作例が先行し，佐藤伝蔵「素戔嗚尊の大蛇退治」（日本通運，1972），北村隆「素戔嗚尊大蛇退治」（JR，1998），竹浪比呂央「素戔嗚」（マルハ，2004）【写真 1】[(3)]がある。その後，正面に配置したねぶたが登場する。穐元和生「素戔嗚尊『八岐大蛇退治』」（東北電力，2009），北村蓮明「疫病祓いスサノオ神話」（日立，2021），北村春一「素戔嗚尊八岐大蛇退治」（NTT，2022）【写真 2】がある。

・天照大神と天鈿女命

日本神話の天の岩戸開きに登場する。素戔嗚尊の乱暴に怒った天照大神が岩戸に隠れたため，外で天鈿女命が踊り，神々が賑やかに騒ぎ立てたことから，天照大神が岩戸を少し開いたところを手力男神が引き開けた。ねぶたの造形では，女神である天照大神と天鈿女命，それに怪力の手力男神を配することが一般的である。作品としては，北川啓三「天の岩戸」（東北電力，1958）が古典的な作品で，川村勝四郎「天の岩戸」（国鉄，1970），山内岩蔵「天の岩戸開き」（青森大学，1981），北村隆「天の岩戸開き」（JR，1987），穐元鴻生「天の岩戸」（東北電力，1997），北村春一「天岩戸伝説」（NTT，2016）【写真 3, 4】などがある。

このほか，日本神話の天孫降臨をテーマとしたねぶたで，猿田彦と天鈿女命を組み合わせた，北村隆「天孫降臨」（ビブレ，1999），猿田彦と瓊瓊杵尊を組み合わせたねぶたの見送りに天照大神を配した，竹浪比呂央「天孫降臨 猿田彦」（JR，2010）【写真 5】がある。

・滝夜叉姫

平将門の娘とされる伝説上の人物であり，山東京伝の読本『善知鳥安方忠義伝』などに妖術使いとして登場する。ねぶたでは，髑髏を操って大宅太郎光圀と戦う造形として，北村隆「滝夜叉姫と太郎光国」（JR，1993），北村春一「妖術師 滝夜

写真 3　北村春一「天岩戸伝説」正面（NTT，2016）

写真 4　北村春一「天岩戸伝説」見送り（NTT，2016）

写真 5　竹浪比呂央「天孫降臨 猿田彦」見送り（JR，2010）

写真 6　北村春一「妖術師 滝夜叉姫」（NTT，2017）

写真 7　北村麻子「執金剛神と平将門」見送り（市民，2015）

叉姫」（NTT，2017）【写真 6】が，刀を持って戦う造形として，北村麻子「執金剛神と平将門」（市民，2015）【写真 7】がある。また，平将門や息子の相馬太郎良門が登場するねぶたの見送りとして，竹浪比呂央「将門の神霊 瀧夜叉を救う」（2008，JR），竹浪比呂央「相馬太郎良門 妖術を得る」（2014，JR）が作られている。

・綱手

江戸時代後期の読本に登場する妖術使いである児雷也（自来也）の物語に由来し，蝦蟇の妖術を使う児雷也，妻でナメクジの術を使う綱手，宿敵の大蛇丸，この三者の三すくみを題材にしたねぶたである。正面に児雷也と大蛇丸，見送りに綱手を配置するのが定番になっており，千葉作龍「自雷也」（電電公社，1975），北村隆「児雷也」（JR，1998），穐元鴻生「児雷也」（ヤマト運輸，2003），北村隆「児雷也」（ヤマト運輸，2014）【写真 8】，有賀義弘「児雷也」（自衛隊，2018）が作られている。

・お松

「鬼神のお松」として知られる女盗賊だが，架空の人物と考えられている。青森県の奥入瀬渓谷には，お松の住み家とされる場所の伝承があることもあり，ねぶたに作られている。かつて殺した男の息子，夏目仙太に討たれたとされ，ねぶたでは短剣を持ち，夏目仙太と戦う姿が作られている。北村隆・明「鬼神お松」（板金，1981），福井祥司「夏目仙太と鬼神お松」（日通，1998），石谷進「鬼神のお松」（ねぶた愛好会，2000），北村蓮明「十和田湖伝説 八之太郎と南祖坊」の見送り（パナソニック，2013）【写真 9】がある。

・巴御前

平安時代末期の女武者で，木曽義仲とともに戦い，武力に優れたとされる。ねぶたでは，長刀を振りかざし，畠山重忠と戦う形で作られることが多い。森次男「巴御前の奮戦」（国鉄，1981），川村心生「巴御前の奮戦」（県庁，1995），北村隆「巴御前」（ビブレ，1998）があるほか，北村蓮明

写真 8　北村隆「児雷也」見送り（ヤマト運輸，2014）

写真 9　北村蓮明「十和田湖伝説 八之太郎と南祖坊」見送り（パナソニック，2013）

写真 10　北村蓮明「怪力朝比奈，北条に挑む」見送り（パナソニック，2016）

写真 11　北村隆「俵藤太と龍神」（ヤマト運輸，2016）

写真 12　北村隆「碁盤忠信」見送り（青森山田学園，2010）

「怪力朝比奈，北条に挑む」（パナソニック，2016）【写真 10】の見送りにも配されている。

・龍女

俵藤太（藤原秀郷）が，勢多の唐橋の下に住む竜神に依頼され，三上山のムカデを退治する話である。退治を依頼するのが龍女である。ねぶたは俵藤太の迫力ある造形を中心に，脇役として龍女を配置する。秋田覚四郎「俵藤太秀郷　三上山大ムカデ退治の場」（消防第三分団，1959），田中巌「俵藤太のむかで退治」（自衛隊，1979），穐元鴻生「勢多の唐橋」（市役所，1984），北村隆「俵藤太と龍神」（ヤマト運輸，2016）【写真 11】がある。

・静御前

歌舞伎「義経千本桜」の「狐忠信」を題材にしたねぶたに登場し，鼓を打つ姿で作られる。佐藤忠信とともに正面に配したのは，北村隆「狐忠信」（ビブレ，1998），福井祥司「義経千本桜」（NTT，2004），千葉作龍「義経千本桜」（パナソニック，2008）で，見送りに置いたのが，有賀義弘「義経千本桜　狐忠信」（自衛隊，2007），北村隆「碁盤忠信」（青森山田学園，2010）である【写真 12】。

・玉虫

平家物語「扇の的」は，那須与一が遠くの船上に建てられた扇を射る話である。ここで扇を持って立つ女が玉虫である。秋田勝四郎「那須の与一扇の誉」（消防第三分団，1962），北村隆「那須与一」（青森大学，1991），有賀義弘「那須与一」（自衛隊，2013）があるほか，北村蓮明「箙の梅景季奮戦」（パナソニック，2014）は，見送りに那須与一と玉虫を配している【写真 13】。

・伊弉冉尊

日本神話に，伊弉諾（イザナギ）と伊弉冉（イザナミ）が，天の浮橋に立ち，天の沼矛で下界をかき回したところ，滴り落ちた滴から大八洲ができたとする物語がある。その神話を題材に，天の沼矛を持つ二神を造形したねぶたである。千葉作

写真 13　北村蓮明「箙の梅 景季奮戦」見送り（パナソニック，2014）

写真 14　内山龍星「天の岩戸」見送り（市Ｐ連，2019）

写真 15　林広海「牽牛織女天の川」（日本通運，2021）

写真 16　北村春一「張順，湧金門の勇姿」見送り（NTT，2015）

写真 17　北村隆「武内宿禰 宝珠を得る」見送り（に組，2014）

龍「古事記　日本創生」（サンロード，2013）がある。また，見送りに配したねぶたとして，北村隆「天孫降臨」（ビブレ，1999），内山龍星「天の岩戸」（市Ｐ連，2019）【写真 14】がある。この 2 台は日本神話をモチーフにしていることから，神話つながりで見送りに配したものと思われる。

・築山御前

松平元信（のちの徳川家康）の正室だが，織田信長から処刑を命じられ，野中重政により殺害された。石谷進が，刀で襲いかかる野中重政に短剣で立ち向かう築山御前という構図で 2 回制作している。「築山御前」（マルハ，1989），「野中重政と築山御前」（ねぶた愛好会，1993）である。

・紅葉

能や歌舞伎の紅葉狩でも知られる，信濃国戸隠の鬼女伝説にちなんだねぶたである。平惟茂の鬼退治を描いたもので，ねぶたの定番と呼べるほど多くの作品がある。しかし，その大半は鬼に変身した後の姿を作っており，鬼に変身する前の女を造形することは少ない。私たち一同「紅葉と平維茂」（私たちのねぶた，2003），千葉作龍「戸隠幻想　紅葉狩」（消防第二分団，2004）が，鬼になる直前の女を作っている。

・織女

七夕伝説に登場する織女で，牽牛とセットで作られる。立田龍宝「雲漢」（青年会議所，2014），林広海「牽牛織女天の川」（日本通運，2021）【写真 15】がある。

・扈三娘

水滸伝に登場する女頭領の一人である。弘前のねぷた絵には頻繁に登場するが，青森での作例は少ない。鹿内一生「水滸伝」（東北電力，1985），北村春一「張順，湧金門の勇姿」（NTT，2015）【写真 16】がある。

以上，2 回以上制作された女性を簡単に紹介した。これをタイプ分けすると次のようになる。

写真 18　北村蓮明「坂上田村麿ねぶた伝説」見送り（日立，2019）

写真 19　竹浪比呂央「大間の天妃神 千里眼と哪吒」（青森菱友会，2014）

写真 20　北村麻子「雷公と電母」（市民ねぶた，2021）

写真 21　北村麻子「琉球開闢神話」（市民，2022）

写真 22　北村春一「毘沙門天と吉祥天」（板金，2022）

・武器を持って戦う女

長刀を振り回す巴御前，短剣で戦う鬼神お松，築山御前，それに扈三娘がある。1回しか作られていないが神功皇后【写真17】，阿屋須【写真18】も当てはまるだろう。合戦はねぶたの定番の題材であるから，戦う女が作られても不思議ではないが，ふさわしい題材が少ない領域かもしれない。しかし，迫力を重視するねぶたの系譜を引き継ぐジャンルとして，今後も一定数の作品が作られていくものと思われる。

・妖術使い

滝夜叉姫や綱手がこれにあたる。妖術使いとして，髑髏やナメクジを操る姿で作られ，対立する太郎光圀，児雷也と大蛇丸などとセットで構成される。鬼女になる紅葉も，これに近いかもしれない。鬼女は「羅生門」「戻橋」「綱館」「大森彦七と千早姫」など，数多くの題材に登場しているが，鬼になった後の姿が一般的であった。今後は鬼になる前の女が作られることも増えてくるであろう。

女性に限らず，妖術使いという題材は，妖気漂う不気味さを持ち，異形，グロテスクな迫力を持った存在として作られてきた。今後もねぶたの題材として定番化していくのではないだろうか。

・静かに鎮座する女神

「天の岩戸」の天照大神は，ねぶたの中心で静かに鎮座する形で作られる。このように，静かな女神を中央に置く造形は，竹浪比呂央「大間の天妃神 千里眼と哪吒」（青森菱友会，2014）【写真19】にも見られる。ちなみにこのねぶたは最優秀制作者賞を受賞し，「ねぶたの家　ワラッセ」に1年間展示された。女性を造形したねぶたの普及に影響があったかもしれない。このような女神には，北村麻子「雷公と電母」（市民ねぶた，2021）の電母【写真20】，北村麻子「琉球開闢神話」（市民，2022）のシネリキヨ【写真21】，それに弁才天や吉祥天（北村春一「毘沙門天と吉祥天」板金，2022）【写真22】など，仏であるが女性として造形されたものも当てはまる。

神格化した女性の造形からは，華麗というよりも優美な印象を受ける。今後，新たな作品が登場する可能性が高い分野ではないだろうか。

・主役を引き立てる脇役

素戔嗚尊の大蛇退治を見守る奇稲田姫，俵藤太にムカデ退治を依頼する龍女，那須与一が射る扇の的を支え持つ玉虫など，題材となる物語に登場し，主役を引き立てる役割を担う。重要な存在であれば，脇役の存在が題材にまつわるさまざまな物語を豊かに呼び起こし，効果的であるが，ねぶたを賑やかにする存在としてアクセサリー的に付加されることもある。

4. 2. 女性を作ったねぶた数の変化

戦後という期間で見た場合には，女性が登場するねぶたは105台で，約8%に過ぎないことは先に述べた。次に，台数の変遷を見ることにする。ここでは1955年を起点に，5年ごとに台数を集計してグラフにした（図1）。正面と見送りを別々に数えたため，両方に女性が登場する場合には両方にカウントしている。なお，2020年以降は，2022年までの3年間の集計であるが，コロナ禍のため2020年は中止，2021年は祭礼の代替行事に9団体の参加，2022年は17団体の参加にとどまったため，ねぶたの数そのものが極めて少ない中での数字である。

こうしてみると，女性の造形は1950年代から見られるものの数は少なく，1980年代になると5年で5台，すなわち年平均1台程度の数になる。1990年代に増加が始まるが，この段階では年による増減があり，安定的な傾向は見られない。数が増加してコンスタントに登場するのは2010年代からで，この時期になってねぶたの1ジャンルを占めるに至ったように思われる。

正面と見送りの区別を見ると，2000年頃から見送りに女性が登場し，2010年代に増加する。正面よりも見送りに多く見られる傾向がうかがえる。正面とは対照的な雰囲気の造形でメリハリをつける点では効果的な配置かもしれない。これは，そもそもねぶたの見送りに人物を造形するよ

うになった時期と一致するものと思われるが，この点は改めて検証が必要である。

なお，受賞との関係を見ると，2001 年に北村隆「諸葛亮孔明と南蛮王」（JR）がねぶた大賞（総合 1 位）を受賞している。このねぶたは，見送りに祝融夫人を配置するものであった。これ以降，女性を作ったねぶたが 3 年に 1 回程度受賞する。女性を正面に配置したねぶたで受賞したのは，2013 年の千葉作龍「古事記　日本創生」（サンロード）で，総合 2 位の知事賞を受賞した。続く 2014 年には，竹浪比呂央「大間の天妃神 千里眼と哪吒」（青森菱友会）が，先に述べたように，ねぶた 1 位の最優秀制作者賞と，総合 2 位の知事賞を受賞した。これは正面中央に女神・天妃神を配し，左右に脇侍の如く千里眼と哪吒を置くもので，女神を主題としたねぶたが 1 位の評価を得た。このことは，以後の作品に影響を与えたのではないかと思われる。

ねぶたの評価 1 位に与えられる最優秀制作者賞を受賞したのは，このほかには竹浪比呂央「龍王」（青森菱友会，2022）だけであるが，ねぶた 2 位と 3 位に送られる「優秀制作者賞」は 12 回に及んでいる。2022 年には，最優秀・優秀の 3 賞のねぶたがいずれも女性が登場するねぶたであった。もちろん，女性を作ったことが直接的に評価を高めたわけではないが，女性のねぶたが一般的になったことの証といえるのではないだろうか。

4. 3. ねぶた造形の新傾向

この傾向が進むと，ねぶたの造形の一ジャンルとして，「華麗」あるいは「優美」なねぶたが流行するのだろうか。

これまで，ねぶたに女性を作る際には，迫力ある男性と優美な女性の組み合わせが多く作られてきた。奇稲田姫は素戔嗚尊，天照大神と天鈿女命は手力男神，滝夜叉姫は太郎光圀，綱手は児雷也と大蛇丸など，セットになる男性像はほぼ決まっている。このように組み合わせで作られるのが一般的であり，女性一人を単独で作るねぶたはまだ出現していない。女ばかりのねぶたも登場していない。しかし，【写真 23】のように見送りに女性一人を配する，あるいは見送りを女性複数で構成するねぶたはたびたび登場している。このことから，女性を見送りに配置することで正面との対比を強調する手法は確立したと見ることができる。そうすると，女性を主題とし，正面に単独で置くねぶたの登場も時間の問題であろう。

なお，工藤友哉氏は，21 世紀以降のねぶたについて，「従来の形容表現であった『殺伐』『異形

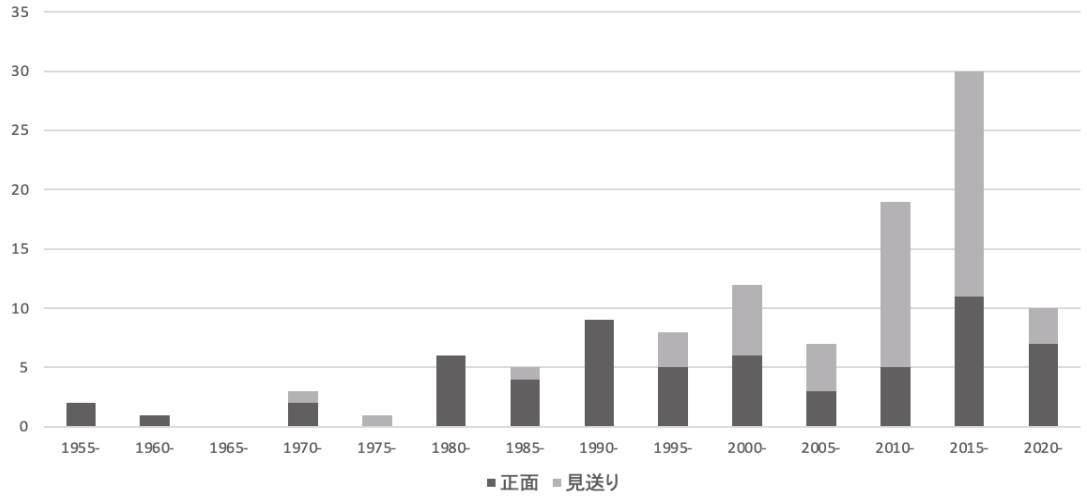

図 1　女性を作ったねぶたの台数の変遷

写真 23　竹浪比呂央「龍王」見送り（菱友会，2022）

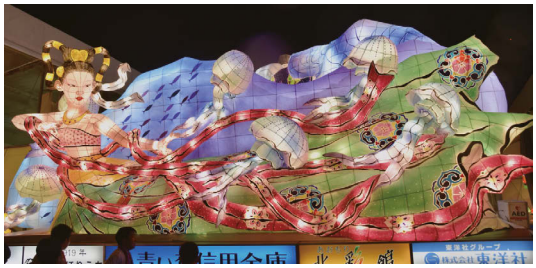

写真 24　北村麻子「琉球開闢神話」見送り（市民，2022）

（グロテスクさ）』が衰退し，生首や血飛沫，女性の半裸表現などは青森ねぶたに相応しくないとして，次第に見られなくなっていった。」と指摘し，「乳房を露わにした女性の半裸表現は 1999 年を最後に登場していない」［工藤　2020：141］としている。半裸の女性は「異形」の表現であるというのが工藤氏の解釈であり，確かにそういう表現は，北村隆「天孫降臨」（1999，ビブレ）を最後に見られなくなった。このことを含めて，女性の造形は艶かしい方向には向かわず，華麗で優美な方向に向かっている。端正で上品なねぶたが一つの潮流として登場するかもしれない（さらに，今回は触れないが，女性とともに子どもや赤ん坊も登場している）。

制作技法について見ると，女性の顔を描く墨の線は細くなる傾向があるため，太い線で迫力を表現しようとする表現は見られない。一方，服装や髪飾り，装身具には鮮やかな色を使いやすいので，豊かな色彩を用いて華やかな雰囲気を表現しやすい。【写真 24】は北村麻子「琉球開闢神話」（市民，2022）の見送りであるが，このように，和装ではない装いも登場している。

青森ねぶたには 5 メートルという高さ制限がある。このため，顔を大きく作り，腰を曲げて上半身を低く屈めたような姿勢を取ることで，ねぶたを大きく見せた。このことは迫力を表現するには適していたかもしれない。しかし女性の造形には，別の制作表現が出てくる可能性がある。たとえば腰を伸ばしてすらりと直立した姿勢を取り，立ち姿を美しく見せることが考えられる。体のひねりは，女性と男性では異なった表現になるだろう。また，顔には髭がないものの，髪形や装身具は多種多様であるから，新たな表現が登場する可能性がある。そういった試みがすでに，特に見送りの造形には見られるように思う。こうした中から，新たなねぶたの潮流が生まれてくることになるかもしれない。

5. おわりに

以上，ねぶたの「造形史」を語る一つの試みとして，女性が登場するねぶたを見てきたが，今回は主として題材の面から，戦後の青森ねぶたを全体として俯瞰する方法をとった。個々のねぶた師の個性的な創作活動や，制作技法については扱っていない。あくまでも青森ねぶたの変遷の大きな流れを考察し，作品群としての変化の傾向に注目することを心がけた。

いずれにしても，ねぶたは祭りの道具であるだけでなく優れた作品である。そして，ねぶた師個人が創作した成果ではあるが，社会を反映しつつ変化することで人々に受容されている。女性を作ったねぶたが増加していることは，そのような社会の変化があり，それがねぶたにも反映し，それを観衆が受け入れていることの現れであろう。時代とともに変化するねぶたの造形を，今後とも見守っていきたいと考えている。

文　献

阿南透　2003「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103，pp. 263-297

阿南透　2011「青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷」『情報と社会―江戸川大学紀要』21，pp. 161-174

工藤友哉　2020「造形史から紐解く青森ねぶたの伝統＝様式美」『青函“考”路』2020 年号，pp. 130-147

工藤友哉　2021「『青森ねぶた全集』の経緯と現状，今後」『地域学』17，pp. 33-57
澤田繁親　2004『龍の夢―ねぶたに賭けた男たち』ノースプラットフォーム
澤田繁親　2006『龍の伝言―ねぶた師列伝』ノースプラットフォーム
宮田登・小松和彦編　2000『青森ねぶた誌』青森市
宮田登・小松和彦編　2016『青森ねぶた誌　増補版』青森市

《注》

（1）　https://nebuta-museum.com/
（2）　http://www.nebuta.jp/archive/
（3）　本稿に掲載した写真はすべて筆者が撮影したものである。他のねぶたの画像を含め，カラーでご覧になりたい方は，注1に示したウェブサイトで検索すれば多くの写真を見ることができる。